

## 「笑顔は世界の共通語」なのか？

—笑顔の機能と普遍性をめぐる議論の変遷—

山田仁子

### 序

2019 年末に始まり 2022 年の現在も続くコロナ禍において、マスクを手放せない日々が続いている。マスクの着用は、現代社会に生きる私たちのコミュニケーションにおける顔の表情の重要性を再認識させることとなった。

アメリカ、ニューヨークの地下鉄ではパンデミックが始まったばかりの 2020 年 2 月、マスクをしたアジア人女性が襲われた (Palmer, *Newsweek*, 2/5/2020)。この事件にはマスクを着用することが既に罹患していると解釈されてしまう社会であったことや、人種や性での差別も絡んでいたとは考えられるが、やはりマスクで表情が見えないことへの不安や嫌悪も大きな要因であったと推測される。アメリカではマスク着用を義務付ける国の政策にも多くの人が “No Masks” などのプラカードを掲げて激しい抵抗運動を展開した (Mervosh et al., *New York Times*, 7/16/2020)。

一方、マスク着用比較的慣れている日本では、ほとんどの人が蒸し暑い夏にもマスクを進んで着用し続けたが、マスクで顔が見えないことへの居心地の悪さは多くの人が感じたと思われる。顔が見えない不安を解消する対策がさまざまな場面で工夫された。透明のフェイスガードやパーティションの利用が進められ、マスクの下の表情を伝える工夫をする店もある。例えば、イオン九州とマックスバリュ九州は 2020 年 6 月に下記(1)の見出しで「マスクの下は笑顔です」キャンペーンを打ち出した。

(1)感謝の気持ちをみえるカタチで伝えたい

「マスクの下は笑顔です」キャンペーン

(イオン ニュースリリース, 2020/6/4)

客の応対をする店員の胸に「マスクの下は笑顔です」と書かれたカードをつけたのである。こうしたキャンペーンが展開され、また多くの人に受け入れられた背景には、店員が客に対して向ける顔が笑顔である状態が当然のこととして期待されているという事実がある。店員のマスクの下の顔が「笑顔」であると分かれば、客はひとまず安心する。店員が客に見せる笑顔は、店員が客にかける「いらっしゃいませ」「ご来店ありがとうございます」といった言葉とほぼ同じ機能を持つのかもしれない。コロナ禍でマスク着用が強

いられる中に起きた、このような人々や企業の反応は、表情、特に笑顔が、アメリカや日本の現代社会におけるコミュニケーションで重要な働きをしていることを明確に示すことになったと言えるだろう。<sup>1</sup>

もっともコロナ禍になる以前から、コミュニケーションにおける笑顔の重要性はある程度認識されていた。2011年シンガーソングライターの高橋優氏が発表した『福笑い』という作品の歌詞の中に次の(2)のような1節がある。

(2)きっとこの世界の共通言語は英語じゃなくて笑顔だと思う

(高橋優, 2011)

この歌詞は、笑顔を「言語」に喩え、またその「言語」が世界で共通に通じるものであるという認識を含んでいる。「笑顔は世界で共通に通じる」という考え方は、その後多くの場面で多くの人の口や手から発せられるようになる。2019年に全英オープン女子で優勝した渋谷日向子氏は、その笑顔が国内外で有名になり、優勝後の帰国会見では、次の(3)のように語った。

(3)やっぱり笑顔は世界共通であって、言葉が通じなくてもコミュニケーションが取れるんだなあとは本当に今回すごく感じました。

(日本経済新聞, 2019/08/06)

「笑顔は世界共通」の前に「やっぱり」と言い添えていることから、このような笑顔に対する捉え方が、日本社会に浸透していたことが窺い知れる。

中高生を対象とするさまざまな標語コンクールでも、高橋優氏が書いた「世界の共通言語は英語じゃなくて笑顔」という表現は、少しずつ形を変えながら長年に渡り繰り返し受賞作品に用いられている。以下の(4)-(7)はその一部である。

(4) 笑顔は世界の共通語 (京都市人権ナビ, 2016)

(5) 笑顔とは 世界をつなぐ 共通語 (佐世保市, 2020)

(6) 共通語 英語じゃなくて 笑顔です (福岡大学, 2020)

(7) 共通語 英語じゃなくて 笑顔だよ (北九州市, 2021)

「笑顔は世界の共通語」という捉え方が、応募する若者と審査する大人という、異なる世代で、日本では広く受け入れられていることを、この状況は示している。

---

<sup>1</sup> 会話の進行における笑顔の働きについての分析も進んでいる(池, 2021)。

しかし、本当に「笑顔は世界の共通語」と言えるのだろうか。この問いに答えるためには、2つの点を検証する必要がある。まず、笑顔が世界中のどこにおいても「言語」に喩えられるほどにコミュニケーションで機能するものなのかという点と、次に笑顔は世界で共通と言える普遍性を備えるものなのかという点である。本稿では、これら2つの問題を念頭に、笑顔を中心とする表情について、古代ギリシャから20世紀までの議論の変遷を、大まかにたどっていく。

## 1. 紀元前ギリシャ哲学の時代

笑顔という表現は、言い換えれば「笑いが顔に現れ出た表情」のことである。古代ギリシャの哲学的議論においては、「笑い」の表情を普遍的なものとして扱い論じるが、その表情が現れ出る場所としては、顔に限定していない。プラトンの『ピレボス』の中でソクラテスは「笑い」についてプロタルコスと次のような議論を始める。

(8) Σωκράτης: Χαίρομεν δὲ ἢ λυπούμεθα, ὅταν ἐπ' αὐτῇ γελώμεν;

Πρόταρχος: Δῆλον ὅτι χαίρομεν. (Plato, 1889, XLIX 49e, p.126, 下線は筆者)

ソクラテス: 我々は笑う時喜んでいるだろうか、悲しんでいるだろうか。

プロタルコス: もちろん、喜んでいます。 (筆者訳)

ソクラテスが「我々が笑う (γελώμεν) 時、我々は喜んでいる (χαίρομεν) のかそれとも悲しんでいる (λυπούμεθα) のか」と尋ねると、プロタルコスは、喜んでいる (χαίρομεν) と答える。笑いという表情は喜びという感情と結びつくことで二人はまず合意するのである。しかし二人の会話はさらに次の(9)のように続き、ソクラテスはプロタルコスに、たとえ笑っていても喜びと共に他の感情も存在する場合があることに気づかせる。友人の愚かなことを笑う時、笑う人の心の内では、喜びと共に痛みも感じているというのである。

(9) ... when we laugh at the ridiculous qualities of our friends, we mix pleasure with pain, since we mix it with envy; for we have agreed all along that envy is a pain of the soul, and that laughter is a pleasure, yet these two are present at the same time on such occasions.

(Plato, 1925, L 50a)

以上の議論が主張するのは、笑いの表情と喜びの感情の基本的な結びつきは認められるということと、また同時に基本的には笑いの表情と結びつかないような感情も、現実には混在する可能性があるということである。笑いの表情については、どのような性質

のものなのかという点についての議論はない。笑いの表情の特徴については、議論する必要のないほどに普遍性を当然視していたと考えられる。

アリストテレスの『動物部分論』(Aristotle, 1937)では、感情と表情が明確に分離される。この書物では身体と精神を切り離した議論が進められるのだが、表情は身体に、感情は精神にそれぞれ属するものと捉えるため、表情と感情もまた切り離した分析が展開される。笑いはいったん精神の領域から切り離され、身体に起きる現象と捉えられる。この現象としての笑いは、精神の領域である喜びという感情が起きた場合にも現れるが、喜びのような感情がなくとも現れる場合があることが指摘される。笑いという現象が起きるプロセスは、何よりも身体内で起きる反応であり、必ずしも感情を必要とはしないのである。

『動物部分論』は、心臓や肺や肝臓など身体を構成する部位について順次論じる構成を取るが、この中で、横隔膜の項に笑いの説明は組み込まれている。喜びを感じる時だけでなく、くすぐられた時にも、体内で熱が発生し、この熱が横隔膜(diaphragm)を動かして笑いが起きると説明する。戦場で横隔膜が傷ついた場合にも、そこに熱が発生してこの熱が横隔膜を動かし笑いを引き起こすことがあるとする。くすぐられる刺激や戦場の傷により引き起こされる笑いについての説明は以下の通りである。

(10) . . . it is when heated that they quickly make the sensation recognizable is afforded by what happens when we laugh. When people are tickled, they quickly burst into laughter, and this is because the motion quickly penetrates to this part, and even though it is only gently warmed, still it produces a movement (independently of the will) in the intelligence which is recognizable. . . .

It is said that when in war men are struck in the part around the diaphragm, they laugh on account of the heat which arises owing to the blow.

(Aristotle, 1937, Book III, part 10, p.281)

笑いを人間の身体で生じる特定の変化として説明していることから、笑いについてアリストテレスは、人間に共通する普遍的なものとして捉えていたと判断される。しかし『動物部分論』で議論される笑いは横隔膜周辺に発生するとされていることから、この時代に笑いの表情と認識されていたものは、現代多くの人が第一に思い浮かべる顔の表情ではないだろう。アリストテレスは、胸腹部を中心とした身体の動きとこれに伴う笑い声によって、笑いを認識している。つまり胸腹部を震わせて笑い声を立てる様子が、アリストテレスの時代の典型的な笑いの表情であったと考えられるのである。

アリストテレスの時代のギリシャでは、胸腹部を震わせ笑い声を立てる様子が普遍的な笑いの表情と認識されたのに対して、現代の欧米や日本では、顔に現れる変化を普遍

的な笑いの表情とするのならば、もはや「笑顔」の普遍性は時代や地域を超えてまで成立するものではないということになる。「笑顔」の普遍性以前に「表情」の捉え方の普遍性までもが、もう一度見直すべき問題として浮かび上がってくる。現代の日本や欧米で「笑顔」や smile が重要な意味を持つのは、感情が現れる場所として顔が特に注目される時代であり社会であることが一つの大きな要因であろう。感情が現れる場所として注目する身体部分が、古代ギリシャでは身体全体あるいは上半身であり、現代の欧米や日本では顔だとすると、表情の捉え方が、地域によって異なり、また時代により変化してきたと考えられるのである。

## 2. 17世紀デカルトの哲学とル・ブランの美術

紀元前4世紀にアリストテレスが展開した身体の仕組みと関連づける解剖学的な笑いの解釈は、17世紀のデカルト、19世紀のベルやデュシェンヌやダーウィンの表情全般の研究へと受け継がれることとなる。本節では、17世紀に哲学者デカルトがいかに表情を分析したかを概観し、ほぼ同時代の画家ル・ブランが描いた表情の絵から、当時のフランスにおける表情の捉え方を確認する。

17世紀にデカルトは、感情が引き起こされ表情が現れる脳や身体内でのプロセスを解明しようとした(Descartes, 1649)。アリストテレスと似た立場ではあるが、中心に据える対象は異なる。アリストテレスの『動物部分論』が身体の仕組みを解明することを主眼にし、感情や表情についてはその中で軽く触れた程度であったのとは対照的に、デカルトは、感情とその表れとしての表情に焦点を当てる。外界からの刺激により感情 *passion* が引き起こされ、続いて表情として外に現れ出る仕組みを、脳や身体で起きる血や *les esprits animaux* (精気) の流れと、それによって変化する筋肉の動きとして説明するのである。基本的な感情を6種類とし、他の様々な感情はこの基本的な感情6種類の組み合わせであるとした。基本的な感情としては、*l'admiration* (驚き)、*l'amour* (愛)、*la haine* (憎しみ)、*le désir* (欲望)、*la joie* (喜び)、*la tristesse* (悲しみ)を挙げている。感情が引き起こされ表情として現れる際の身体での変化のプロセスを詳細に論じてはいるが、最終的に表出される表情としては、顔の変化についての記述が多い。17世紀フランスは、顔が、表情の現れる場所として最も意識される時代であったと推察される。

デカルトとほぼ同時代にルイ14世の第一画家として活躍したル・ブランは、デカルトの分析にはほぼ則ったような内容で、感情をいかに絵画で表現するかについて、フランス王立絵画彫刻アカデミーで講演した(Le Brun, 1698)。デカルトと全く同種の基本的な感情 *Les Passions Simples* 6種類を確定し、それらをさらに組み合わせた感情 *Les Passions Composées* を提示し、感情という魂の動きがいかに筋肉を変化させ表情となって現れるかを詳細に説明している。ル・ブラン没後に出版された講演録には、おそらくル・ブラン自身が描いた絵を元にベルナール・ピカールが書き写したと思われる様々な表情の絵

が挿入されている。以下の絵（図1）はその一部で、6種類の基本的な感情 *Les Passions Simples* に対応する表情の絵である。ル・ブランは、ルーブル美術館が公開している関連の絵からも分かるように（<https://collections.louvre.fr>）、顔の各部位の特徴を区別して抽象的に図解した絵や、絵画としての完成形と言えるほど具象的な絵など、異なる形式で表情を表す絵を多く残している。ピカールはこうした豊富な絵の中から、ル・ブランの講演録に組み込む資料として、形式を定めずに採用したようで、ここで示す6種類の表情の絵も、簡略化した図と現実感のある具象的な絵とが混在している。

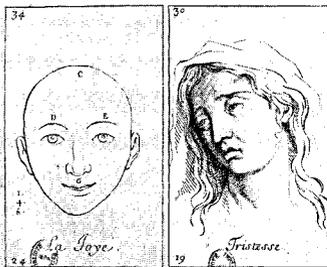


L'admiration  
驚き

L'Amour Simple  
単純な愛

La Haine  
憎しみ

Le Desir  
欲望



La Joye  
喜び

La Tristesse  
悲しみ

図1. ル・ブランによる6種の基本的感情の表情 (Le Brun, 1698)

紀元前古代ギリシャのアリストテレスと17世紀フランスのデカルトやル・ブランでは、明確に異なる点が2つある。1つには感情と表情の関係の捉え方の違い、2つ目には表情が現れる身体部位の違いである。

アリストテレスの場合には、感情と表情（あるいは表情のように見える身体上の様子）の間に絶対的な結びつきを認めはしなかった。一方、デカルトとル・ブランでは感情と表情の間に固定的対応関係を確立させている。アリストテレスは喜びの感情により起きる表情、その身体上の変化は、喜びを伴わない場合でも物理的な刺激により現れ得ることを示したが、デカルトは、感情（*passion*）というものは表情（*expression*）として現れるとして、感情と表情を密接に結びつくものとして捉える。ル・ブランの表情の絵には全て感情のタイトルが付けられている。ル・ブランは一定の特徴を備えた表情を描けば、人の感情を描き出すことができると信じたのである。

表情が現れる場所について、アリストテレスは身体全体を考慮する範囲に入れていたが、デカルトとル・ブランは顔だけにほぼ限定している。アリストテレスの笑いは主に横隔膜の動きとして示された。一方ル・ブランは、講演の中でこそ身体の変化についても説明したが、表情を示すために描いた絵は、ほとんど全てが顔の部分のみである。感情が現れる場所、表情と結びつく身体部位は顔というのが、この時代には確立していた認識だと考えられる。

ル・ブランはアカデミーの画家や彫刻家たちにも感情を描き出す表情の型を伝えようとした。ル・ブランが描いた表情の絵は、後世の画家達の手本として長く利用されることになる（小佐野, 1999）。ル・ブランの表情の絵の人気は、感情と顔に現れる表情の関連づけを形式化し、この形式を多くの人が共有することにつながっていった。ル・ブランの顔の表情の図解の普及は、顔の表情が感情を伝える共通の言語として機能するという捉え方の基盤を確立させることになったと推測される。

しかし、デカルトとル・ブランが基本的であるとし、普遍性を当然視していたと思われる6種類の感情と、これを表す表情は、現代に生きる人々の感覚からすると、基本的とも普遍的とも受け入れ難い点も多いと思われる。特に現代日本に生きる人々にとっては、17世紀のフランスに生きた二人が基本的感情とした *l'admiration*（驚き）、*l'amour*（愛）、*la haine*（憎しみ）、*le désir*（欲望）、*la joie*（喜び）、*la tristesse*（悲しみ）の中で、基本的な感情として問題なく受け入れるのは、喜びと悲しみだけではないだろうか。驚き、愛、憎しみ、欲望の4つは、刺激を与えてくる対象の存在が必要とされる。アリストテレスの笑いの議論も、デカルトの感情の説明も、どちらも出発点として何らかの刺激が存在した。どちらも、外部世界からの刺激があって初めてこれに対する反応として感情を捉え説明している。これに対して、現代21世紀の日本語圏では、感情を人間の内面的な心の変化として捉える傾向が強いと感じる。

本稿の後半で検討する20世紀アメリカの心理学者エクマンによる6種の基本的な感情、*happiness*（幸福）、*sadness*（悲しみ）、*surprise*（驚き）、*fear*（恐れ）、*anger*（怒り）、*disgust*（嫌悪）と比較しても、デカルトやル・ブランによる基本的な感情の中で一致するのは半分の3種だけである。エクマンの「驚き」「幸福」「悲しみ」はデカルトとル・ブランの「驚

き」「喜び」「悲しみ」の3種類にほぼ共通するが、他の3種類は異なる。例えば、デカルトとル・ブランが含まれた「愛」はエクマンの基本的な感情に含まれていない。愛を基本的な感情とするのには、フランスの文化が影響していると考えられる。感情をどのように認識するのか、またどのような感情を重要視して基本的と判断するのかは、地域や時代により、文化により異なるということが明らかであろう。

表情の特徴も、17世紀のフランスと現代21世紀の欧米や日本とは異なる点が多い。ル・ブランの描く「愛」や「喜び」の表情は非常に穏やかで、現代人の目でこの絵が表現する感情を解釈することは難しいと思われる。「悲しみ」の表情もひどく疲れた表情のようにも見える。現代の絵文字であれば悲しみの表情は、涙を流して泣く凶柄となるだろう。

なお、現代の欧米で好まれる笑顔の口角を上げて歯を見せる特徴や、日本で好まれる笑顔の細めた目といった特徴は、ル・ブランの描く表情の絵では、悪意が伴う場合の喜びの表情に用いられている。ル・ブランによる *le ris* (悦楽) の表情 (図2) は、口角を上げて歯を見せ、目を細めて笑っているが、かなり不快な印象である。*le ris* (悦楽) は基本的な感情にも入れられてはいない。現代の欧米や日本であれば普遍的な笑顔として好まれるはずの表情の特徴が、17世紀のフランスでは、よろしくない感情から生じる不快な表情を示すとして拒絶されていた可能性が高いのである。



図2. *Le Ris*(悦楽) (Le Brun,1698)

感情と表情については、紀元前のアリストテレスも、17世紀のデカルトとル・ブランも、また20世紀のエクマンも普遍的なものとして分析したが、その内容はそれぞれに異なり一致しない。いずれも自らが属する地域や時代の文化からの影響を免れることができていないのである。基本的な感情であると判断する感情は、時代と地域で異なる。デカルトとル・ブランは17世紀のフランスで重要な意味を持った感情を列挙し、エクマンは20世紀のアメリカで重要な意味を持つ感情を列挙した。感情と結びつく表情も、それぞれの時代それぞれの地域で典型的であるとして受け入れられていたものを、普遍的な

ものとして扱っている。しかし現実には、感情も表情も完全に普遍的であることは難しく、文化の影響を受けるものと考えられるのである。

### 3. 19世紀解剖学とダーウィン進化論

19世紀に入ると、解剖学的な考え方に留まらず、実際に解剖学を基盤とする表情の研究が行われた。1806年には、芸術にも造詣の深いスコットランドの解剖学者チャールズ・ベルが、*Essays on the Anatomy of Expression in Painting* を発表する。この書物のタイトルからも分かるように、ベルは自らの研究を“the anatomy of expression”（表情の解剖学）とし、また自ら描いた表情の解剖学的なスケッチを添えて painting（絵画）のために表情の解説をしている。芸術作品に言及しながら、芸術家は筋肉についての正確な知識を獲得すべきであると説く（Bell, 1806, p.10）。ベルにとっての表情はデカルトやル・ブランと同様に、感情と密接に結びつくものだが、ベルは、感情が表情となって顔に表れる過程の顔の筋肉の動きを詳細に論じる。

ベルは全ての感情を“pain”（苦痛）と“pleasure”（快楽）という2つの大枠に分類する。苦痛は顔の筋肉を緊張させ、快楽は弛緩させて人の表情を生み出す。この2種の感情は、さらに希望や恐れが混じることなどで、感覚の強弱などが異なる細分化した感情となり、表情を変化させるのである（Bell, 1806, p.108, 112）。

(11)のように、ベルは表情を「普遍言語」(universal language) であるとし、人間の顔には表情のためだけに機能する筋肉が存在すると主張した。このような顔の筋肉は、表情の組織 (organs of expressions) として働き、普遍言語を機能させる表情の道具としての役割を担うと考えたのである。

(11) . . . we find besides, several peculiar muscles, to which no other office can be assigned, than to act as organs of expression; to serve as instruments of that universal language . . .

(Bell, 1806, p.88, 下線は筆者)

続く箇所(12)では、顔つきが感情の指標となること、表情と感情が一つ一つ対応する組み合わせが決まっていると明言する。

(12) . . . the countenance is an index of the mind, having expression corresponding with each emotion of the soul. (Bell, 1806, p.88)

こうした表情と感情の関係は言語における単語とその意味の関係に対応している。表情をその構造と機能の両面で、言語になぞらえて捉えていたと言うことができる。

ベルの研究は、感情と表情の結びつきを強固なものとして捉え、表情が現れる場所を顔とし、また表情は人間に生来備わっている普遍的なものとしており、基本的にはデカルトやル・ブランと共通した感情と表情の捉え方を受け継いでいると言えるだろう。

ベルが筋肉の動きを意識して描写した喜びの表情は次の(13)のようになっている。

- (13) In joy the eyebrow is raised moderately, but without any angularity; the forehead is smooth; the eye full, lively, and sparkling; the nostril is moderately inflated, and a smile is on the lips.  
In all the exhilarating emotions, the eyebrow, the eyelids, the nostril, the angle of the mouth are raised.  
(Bell, 1806, p.133, 下線は筆者)

19世紀初頭のスコットランドでベルは、喜びに伴う眉や鼻腔の動きにまで気を配りながらも、笑顔についてはやはり下線部で示した通り、口元で判断していたのである。目は現代のアメリカなどと同様に見開かれ輝いており、現代の日本で好まれる細めた目にはなっていない。

19世紀後半に入る頃にフランスの神経学者デュシェンヌは、感情が顔の表情となって現れる仕組みを、電気生理学的に明らかにしようとした (Duchenne, 1862)。被験者の顔に電極を当て、顔のどの部分の筋肉が動くときどのような表情になるのかを実験して、これを写真に撮って記録した。デュシェンヌの場合には、身体全体の変化は考慮せず、顔だけを分析の対象としている。顔の筋肉を“*muscles expressifs*” (表情筋) として、様々な表情に対応する筋肉を、*muscle de l'attention* (注目筋)、*muscle de l'agression* (攻撃筋)、*muscle de la joie* (喜び筋)、*muscle de l'ironie* (皮肉筋) などと特定して、表情と筋肉の対照表を作り上げた (Duchenne, 1862, pp.42-47)。デュシェンヌの表情の捉え方は、感情が実際には伴わなくとも発現可能とする点ではアリストテレスの考え方に共通する。アリストテレスが、喜びの感情などなくとも、くすぐりや戦場の傷によって笑いの表情が生じ得ることを論じたように、デュシェンヌも、電気の刺激によって表情が生じることを前提に実験している。科学的な実験による客観的な研究のように見えるが、デュシェンヌは自分の目の前の表情が対応する感情の種類について、自らの判断に何の疑いも抱いていない。感情と表情の組み合わせの普遍性を当然視していたのである。

デュシェンヌが喜びという感情に対応する表情を生み出す筋肉として、*muscle de la joie* (喜び筋) と名づけた筋肉は、“*Grand zygomaticus*” と記載され図示もされている。口角から耳元へと走る頬の筋肉である。「大頬骨筋」と訳すことのできるこの筋肉が動くとき口角が上がった表情になる。

デュシェンヌはこの「喜び筋」を特定した後に、目元の変化についても言及している。筋肉を電気で刺激されたのではなく、本心から喜びを感じている時の表情は、口角が上がるだけでなく、下まぶたも独特の動きをすると指摘するのである。この口角が上がるだ

けでなく目元も変化する喜びの表情は、20世紀にエクマンがデュシェンヌに敬意を表して「デュシェンヌ・スマイル」と名付け、本当の喜びの感情を反映する表情であるとした(Ekman, 1989, p.155)。デュシェンヌもエクマンも、口角が上がっただけの笑顔は“fake smile”であり、目元の変化が、その笑顔が本物“genuine smile”であることを示すとしたのである。興味深いのは、デュシェンヌもエクマンも喜びの表情として、目元の変化に注目したのにもかかわらず、それはあくまで口元の変化があつての上のものとして認識していた点である。目元の変化が喜びの表情を示す第一のものであると認識していたならば、目元を変化させる筋肉を「喜び筋」としたはずである。しかし、デュシェンヌは口角を上げる筋肉を「喜び筋」と命名した。目元に変化がなくとも、口角が上がった表情を「笑顔」と判断した。デュシェンヌが喜びの表情と見做したのは、やはりベルと同様に、口角が上がるという特徴を持つ笑顔だったのである。

進化論で有名なイギリスのダーウィンは、ル・ブランの表情の絵やベルやデュシェンヌたちの研究に刺激を受けて、1872年に進化論の立場から、表情についての研究を発表した(Darwin, 1872)。ベルやデュシェンヌの、人間の顔の筋肉が生まれ持って表情を表すために存在するという考え方は、次の(14)の部分が示すように、ダーウィンの進化論には相容れぬものだったため、生物の進化の観点から表情というものを捉え直す必要があつたのだ。

(14) . . . when I read Sir C. Bell's great work, his view, that man had been created with certain muscles specially adapted for the expression of his feelings, struck me unsatisfactory.  
(Darwin, 1872, p.19)

この後ダーウィンは、(15)のように続け、どのような感情の時にどのような表情をするのかということについては、動物も人間も、他の個体とのコミュニケーションを取るなどの環境で役立つように、徐々に「獲得」してきた「習慣」であるとする。

(15) It seemed probable that the habit of expressing our feelings by certain movements, though now rendered innate, had been in some manner gradually acquired. (Darwin, 1872, p.19)

この主張の裏付けとしては、乳児が、涙を流して泣く表情を獲得していくという例を挙げている。乳児は誕生の瞬間から、ただ叫ぶような表情については元々備えているのだが、生後しばらく経つと、涙を流しながら泣く表情を獲得していくという観察結果を記録している(Darwin, 1872, pp.154-155)。

ダーウィンの表情研究の対象はベルやデュシェンヌのように欧米の一般的な成人の顔だけに限らない。まず社会や文化の影響をまだあまり受けていない幼い子供や自らの意

志による感情制御が困難になっているような精神病患者を、人間の生来の表情を観察するための対象とした。また世界各地の人種や民族まで観察の対象に加えた。さらに犬や猫、象や猿など様々な動物の表情についての観察もした。直接観察できない異国の民族や動物については、その土地に住む協力者から情報を集めた。表情が現れる場所として観察する対象も、顔だけにとどまらず髪や身体の変化まで含めた。例えば人間ならば恐怖で体が震えることや、犬の場合ならば尾を振ることや吠えることなどにまで観察の対象を広げている。

人間の表情の普遍性については、ダーウィン以前の研究が疑うことなく前提としていたのに対して、ダーウィンは可能な限り客観的に様々な観点から普遍性が成立するのを見直そうとした。結果としては、(16)のように、基本的な感情と表情の関係は、世界中でかなり共通していると結論づけている。

(16) . . . the different races of man express their emotions and sensations with remarkable uniformity throughout the world. (Darwin, 1872, p.132)

こうした表情の普遍性を、ダーウィンは、人間が進化の過程で、多くの表情を順次獲得してきた結果と考えるのである。

ダーウィンは表情の細かな特徴についても、世界中からの情報を収集して確認しようとした。当時、イギリスからは宣教師や植物学者など多くの人たちが世界中に移り住んでいたため、ダーウィンはこうした人たちからの協力を得ることができたのである。特に興味深い調査項目は、笑いの表情で涙が出るという特徴について、さまざまな人種民族で観察されるかというものだ。インド、中国、オーストラリア、南アフリカ、北アフリカ、北アメリカなど、世界各地の複数の民族に属する人達について、その頻度や理由に差はあるものの、大笑いする時に涙を流す様子が見られるという報告を受け記録している(Darwin, 1872, pp.209-210)。この種の笑い方をダーウィンは“excessive laughter”と表現し、笑う表情の一種として分類する。

ダーウィンの時代のイギリスでは、涙が出るほどの笑顔の普遍性は、他の表情よりもさらに念入りな確認が必要だったのだと推測される。ダーウィンが表情の研究を始めるにあたって参考にした、17世紀フランスのル・ブランの絵では、基本の喜びの表情は図1で見たように非常に穏やかな顔だった。これに対して図2の、口を開きさらに目を細めるという動きをした表情は、崩し過ぎることによる下品さを伝えていた。ジョーンズによると、西洋絵画において歯を見せるほどに崩した笑顔は、当時、貴族でない平民であるか感情を制御できない狂人であることを表すものであり、18世紀後半にエリザベト・ルイーゼ・ヴィジュ・ル・ブランが描いた、白い歯をわざわざに見せて微笑む自画像は美術界の革命だったと言う(Jones, 2014)。19世紀に入ってデュシェンヌが記録した表情

の写真では、口を開いた笑顔の写真が含まれている。しかしやはり涙を流すまでの激しい表情の写真は含まれていなかった。ダーウィン以前のデカルトやル・ブラン、ベルやデュシェンヌが活躍した時代、フランスやイギリスでは、涙を流すような笑いの表情は、美術や科学の世界で受け入れられる種類のものではなかったのだと思われる。ダーウィンが活躍した19世紀のイギリスでも、涙を流す笑いの表情は、まともな人間の表情として普遍的なものと認めて良いのかどうか、簡単に判断することはできず、多くの証拠を必要としたものと想像される。

現代の日本やアメリカでは、涙を出す笑いの表情は一般的になっている。日本では、「笑いすぎて涙が出る」「笑い泣き」といった表現が慣用化されている。アメリカでは、2021年に最も使用された絵文字が図3のような“tears of joy”（笑い泣き）だった(Kambhampaty, 2021)。



図3. Tears of Joy

このタイプの絵文字は現代ではアメリカに限らず広く用いられ、日本でも非常に親しみのある絵文字の一つになっている。ダーウィンの笑い泣きの表情に対する記述は、同じ表情が世界の各地で普遍的に観察されたことを示しながらも、表情の捉え方については普遍的でない側面があることを図らずも明らかにする結果となっている。

#### 4. 20世紀アメリカの心理学

20世紀には心理学の分野で表情の研究が進展した。特に社会的な要素を組み込んだ社会心理学が発展する。まずオルポートは、顔の筋肉が元から表情を作るために存在するのではなく、顔の筋肉の本来の機能は、あくまで食べることや息をすることであるというダーウィンの主張を踏襲した上で、さらに修正を加えた(Allport, 1924)。社会環境への適応のために顔の動きの重要性が高まり、顔の表情が「コミュニケーションの手段」(means of communication)、「顔の語彙」(facial vocabulary)として、言語によるコミュニケーションを補うように変化していると主張したのである(Allport, 1924, p.211)。

「顔の言語」(The Language of the Face)の基本には、快の表現と不快の表現の2種がある。快の表情は、口角が上がり、頬も上がり眉の辺りがゆったりとしたものとなる。一方不快の表情は、口角が下がり、頬が下がり、眉根に皺が入る(p.203)。表情がこのような特徴を持つことの根底には、無意識のメタファーが働いているとオルポートは推論し、「模倣表情理論」(Theory of Mimetic Expression)を展開する。顔の筋肉の本来の機能には、匂いを嗅いだり味わったりすることを可能にするように動くということがあがるが、嫌いな人

間や好もしい人間に会った時などにも、不快な匂いを嗅いだり美味しい食事を味わった時のような感覚が起きて、実際には匂いを感じてもしないし味わってもしないのだが、まるで匂いを感じたり味わっているかのように、顔の筋肉が同じような反応をして動くというのである(Allport, 1924, p.216)。接する人間を無意識に匂いや味に喩えて捉え、同じように顔の筋肉も反応して動くという人間に備わる仕組みが、人間の表情の普遍性へとつながっているとす。

ただし、快と不快という普遍的な2つの表情も、生後人が成長し社会生活を送る中で、徐々に複雑になっていく。不快の表情は抑制されることもあり、また大笑い (laughter) の表情は、一人だけである時には現れにくい、大勢の人がいる場面、つまり社会的な刺激があると現れやすい(Allport, 1924, p.257)。表情に社会の影響を認めるのである。

20世紀に入ると、ダーウィンが生きた19世紀よりもさらに海を越えた人の行き来が盛んになり、表情や感情の地域での違いも無視できなくなる。クラインバーグは中国の文化社会における表情の表現が、欧米のものとは大きく異なることを明らかにした(Klineberg, 1938)。目を見開くこと (“round eyes”) が驚きの表情でなく怒りの表情を表すなど、欧米では見られないような表現を多く紹介している。表情の普遍性を完全に否定することはしないが、表情という感情の表し方には文化的な違いも大きいことを示した。

国際的な交流が盛んになる時代、「文化」という要素は、表情の研究においては無視できない要素となった。アッシュは(17)のように、社会が異なってもいくつかの感情表現は普遍的であるが(17-1)、文化的に固有の表情も多いとした(17-2)(Asch, 1952)。

(17) 1. Certain expressions occur universally in response to particular emotional experiences.

2. There is also a wide area of expression that is culturally determined.

(Asch, 1952, p.203)

さらに、そもそも表情の元である感情に、文化的な要素が働いている可能性を示唆した。(18)のように、同じ状況に置かれたとしても、その状況に対する反応として人が感じる感情は、その人物が属する文化によって異なるという可能性を指摘したのである。

(18) . . . cultural conditions can determine the emotions themselves that people will feel in response to given situations.

(Asch, 1952, p.199)

文化人類学の分野でも、表情や感情の研究は行われ、表情の普遍性に疑問を投げかけた。例えば文化人類学者のラバルは(19)のように、表情の元である感情にも文化的基盤が存在すると主張し、感情の研究では文化的な面にも注意を向けることが必要だと説いた(Labarre, 1947)。

(19) Not much attention ... has been directed toward another potential dimension of meaning in the field of emotions, that is to say the cultural dimension.

(Labarre, 1947, p.49, 下線は筆者)

心理学者トムキンズは、感情が普遍的なものであり、感情に基づく表情もかなり普遍的ではあるが社会的な階級や属する社会による違いもあるとして、これを言語に喩えた。(20)のように、感情を普遍文法 (universal grammar) に、また表情を方言 (dialects) になぞらえたのである。

(20) The individual who moves from one class to another or one society to another is faced with the challenge of learning new "dialects" of facial language to supplement his knowledge of the more universal grammar of emotion.

(Tomkins, 1962, p.216, 下線は筆者)

トムキンズは基本的な感情を feeling や emotion とは区別して affect という用語を用いる。Affect は人が生来備えている生物学的反応で、無意識に起こされる。このような変化を人が意識して判断する段階になったものを feeling や emotion と呼ぶ。トムキンズは基本的感情を、以下(21)のように、まず大きく positive, resetting, negative と区分した上で、さらに8種に区分し、それぞれに応じて顔に現れる表情の特徴を添えて示した。

(21) Positive

1) Interest-Excitement: eyebrows down, track, look, listen

2) Enjoyment-Joy: smile, lips widened up and out

Resetting

3) Surprise-Startle: eyebrows up, eye blink

Negative

4) Distress-Anguish: cry, arched eyebrow mouth down, tears, rhythmic sobbing

5) Fear-Terror: eyes frozen open, pale, cold, sweaty, facial trembling, with hair erect

6) Shame-Humiliation: eyes down, head down

7) Contempt-Disgust: sneer, upper lip up

8) Anger-Rage: frown, clenched jaw, red face

(Tomkins, 1962, p.337)

8種の基本的感情が、Enjoyment-Joy、Anger-Rage など2語の組み合わせになっているのは、強弱の差はあっても同種と判断される基本感情をまとめて表すからである。トム

キンズはこうした基本感情の体系を、ダーウィンの進化論を受け継ぎ、自然淘汰により進化してきたもの (the evolution of the affect system by natural selection) と論じる (Tomkins 1962, p.150)。例えば、人が食糧とする獲物を捕らえるため、また自らが食糧とされないために、人の interest, startle, fear といった基本感情は進化したとする (Tomkins 1962, p.151)。獲物を探す場面や獲物とされそうな場面では、獲物があるかどうか確かめようと覗いてみるような interest の感情や、自らが他の動物から獲物にされないように逃げたくなる startle や fear の感情が必要となる。こうした感情が起きることは、感情に合わせて身体のださまぎまな器官が一斉に協働して動き出す仕組みの一部で、人が生き延びるために進化した結果であるとするのだ。

トムキンズは(22)のように基本的感情が現れる一番の場所を「顔」とした。

(22) ... the face is the primary site of the affects (Tomkins, 1962, p.204)

またそれぞれの感情によって顔のどの筋肉がどのように動くのかという感情と顔の筋肉の関係については、デュシェンヌの研究を受け入れ利用した。感情と顔の表情は非常に密接に関連していると認め、顔の表情は「生きた象形文字」(living hieroglyphics) のように、感情を伝えると主張する (Tomkins, 1975)。

トムキンズは、(23)のように、感情と顔の表情は生得的 (innate) なものであり、そのために2者の組み合わせは基本的に決まったパターンが存在することから、さらに人間は、このパターンを意識し意図的に制御することも可能であると言う。人は自らの顔を動かして何らかの感情を伝えることもできるし、また過去に経験した状況をあえて想像することで、他人に見える感情を引き出したり抑え込んだりすることができると言うのである。

(23) ... innate affective responses can come under voluntary control. An individual can learn to turn innately patterned affects on and off by imagining situations

(Tomkins, 1962, p.321)

トムキンズの研究は、顔に現れる表情を言語に喩えるほどに、顔の表情がコミュニケーションにおいて言語と同じような機能を果たすと論じ、また感情が起きて表情として現れるシステムを、人間が生得的に備えているとして、感情を普遍的なものとして扱っている。笑顔についても、この表情は喜びという感情によって現れるのものであるとし、その特徴を先ほどの(21)の 2)に示したように、唇を横に広げ口角を上げるようなものと特定している。こうした特徴を持つ笑顔は、ラ・フランス (La France, 2011) によるとアメリカで見られる笑顔の特徴である。イギリスにおける笑顔の特徴では、口角は上方向に

は向かわず真横に引かれ、歯が見える。日本における笑顔の特徴では、目が細くなる。トムキンズは人間に普遍的であるとする表情の描写に、アメリカ的な笑顔の特徴を当てはめてしまったのである。トムキンズの研究から笑顔に関連する点をまとめると以下(24)のようになる。

#### (24) トムキンズの主張

1. 表情は感情と結びつく普遍的なものである
2. 表情は顔に現れる
3. 顔の表情は言語のように機能する
4. 笑顔は唇を横に広げ口角を上げる特徴を持つ

以上の主張が正しいとすると、唇を両側に広げて口角を上げたアメリカ的な笑顔が、世界で共通する言語のように機能するということになる。トムキンズの研究は、現代多くの人が受け入れていると思われる「笑顔は世界の共通語」という捉え方とほぼ一致している。ただし残念ながらトムキンズの念頭にある笑顔は20世紀のアメリカで一般的だった類の笑顔に限定されており、世界で共通するほどの普遍性を証明したとは言い難い。

トムキンズの顔の表情を重要視した研究をさらに進めたのはエクマンを中心とする研究グループである。エクマンは、表情研究が専門で、顔の表情から人の嘘を見抜くという心理学者を主人公とするテレビドラマ“*Lie to Me*”のモデルになった人物としても知られる(Fox.com)。エクマンたちもやはり基本的にはダーウィンやトムキンズの考えを受け継ぎ、表情を人間に普遍的なものとして捉える立場をとる。Ekman (1972)では、パプア・ニューギニアに住む南フォレ族を対象に、また Ekman, Friesen & Ellsworth (1982)では、西イランに住むダニ族などを対象に感情と表情の組み合わせを調査して、欧米の情報に触れていない人も欧米の人と同じ組み合わせを選択することを明らかにしている。

ただし、エクマンたちの場合には、*display rules* という文化的な要素も提唱する。人の表情は基本的には普遍的なのだが、社会においてどのように見せるかという点では、文化によって異なる規範があるとする。例えば、日本人とアメリカ人を比較した実験では、被験者が一人で周りに人がいない場合には、同じ刺激に対して同じような表情を浮かべるのに対して、権威ある人がそばにいる場合には、日本人は笑う回数が増えるなど表情を制御する様子が観察された。一方アメリカ人には大きな違いが観察されなかった(Ekman, 1972; Friesen, 1972)。

エクマンたちはまた、「感情」とは何かを明確に定義することが困難であると指摘する(Ekman, Friesen & Ellsworth, 1982, p. 33)。初期の研究(Ekman, Friesen & Ellsworth, 1982)では、happiness (幸福)、surprise (驚き)、fear (恐れ)、anger (怒り)、sadness (悲しみ)、disgust/contempt (嫌悪/侮蔑)、interest (興味) という7種類の感情が認定されたとしたが、

その後彼らが選択した方法は、数十年に渡る先行研究において表情との関連で感情を表す語として用いられたものの中から、特に共通する happiness (幸福)、sadness (悲しみ)、surprise (驚き)、fear (恐れ)、anger (怒り)、disgust (嫌悪) の6種類を、基本的な感情として利用することだった (Ekman & Friesen, 2003)。感情の分類方法としては、十分に客観的とはいえず、便宜的なものとなっている。彼らが利用した先行研究はアメリカを中心としたものであるため、アメリカの言語や文化における語彙カテゴリーの影響を受けてしまっている。17世紀のデカルトやル・ブランの列挙した感情の種類が当時のフランスの文化の影響を受けていた状況と同様のことが起きている可能性が高い。

表情については、上記のような経緯で決定した6種の基本的な感情に対応する顔の表情を、普遍的な表情 (universal expressions of emotion) とした。やはり便宜的な選択と言えるだろう。この「普遍的な表情」をエクマンたちは実用的に生かす方向で効率的に分析している。まず、表情が顕著に現れる部位を顔と判断し、顔の分析に特化した。身体の動きは、それぞれの感情に特有のものは特に見られず、一方顔には、それぞれの感情に特有のパターンがあると言う。次に、Facial Action Coding System (FACS) という分析方法を用いて顔の動きの特徴を「顔図解」(the Facial Atlas) にまとめた (Ekman & Friesen, 2003)。人間の顔を、額、目、口元をそれぞれ中心とする3つのエリア (the brow/forehead; the eyes/lids and root of the nose; and the lower face, including the cheeks, mouth, most of the nose, and chin) に分割し、基本的な6種の感情と結びつくそれぞれのエリアでの変化・特徴を記録する。例えば上部エリアでの眉が上がる変化、中央部エリアでの目が大きく開く変化、下部エリアでの顎の下方への動きは、surprise (驚き) という基本的な感情を感じている時の表情の特徴である。さらに下部エリアでの顎が大きく下がり口の開きも大きくなる変化は、驚きの程度が強くなることと結び付けられる。

エクマンたちはこの顔の3つのエリアでの特徴を示す写真を撮影し、このパーツを組み合わせて「普遍的な表情」を表す顔全体の写真を作成した。感情と表情の結びつきを多くの人が理解しやすいように目に見える形で示す態度は、基本的には17世紀のル・ブランと共通する。異なるのは、17世紀のル・ブランが顔全体の絵を用い、また画家を主な対象として論じたのに対し、20世紀のエクマンたちは人間の顔を3分割して表情を分析し、写真を用いて一般大衆をも視野に入れて公開した点であろう。

エクマンたちはトムキンスと同様に、表情を世界で通じる普遍的な言語だと捉えている。「表情はことば」というメタファーにおける表情とことばの関連付けを、更に細かな構造的対応関係を築くことで、より強固なものにした。まず、(25)のように、顔の部分的な特徴一つ一つを捉えた写真を撮影してこれを組み合わせて顔を合成してみると、各部位の特徴がどのように感情を伝える機能を担うかを視覚的に教えてくれると考えた。つまり、顔の各部位の動きは、それぞれに何らかの感情と結びつく性質を持ち、そうした顔の部分が組み合わさった結果である一つの表情は、一つの感情を伝えると考えた。

(25) . . . composite photographs combining different pictures of the same person to visually demonstrate how each part of the face contributes to an emotion message . . .

(Ekman & Friesen, 2003)

この部分と全体の関係は、言語における形態素と語の関係、あるいは語と文の関係に対応する。表情と言語は、どちらも部分が集まることで全体を構成するという共通性を持つと考えたのである。

さらに、エクマンたちは、人の表情から感情を正確に読み取ることも、自分の感情を表情で他者に伝えることもできるとする。この表情と感情の関係は、ことばの形と意味の関係に対応する。1975年に初版が発行されたエクマンとフリーゼンの *Unmasking the Face* (日本語訳は『表情分析入門』) では、顔の部分的な特徴が結びつく感情を提示し、人の顔の表情からその人の感情を正確に読み取る方法を、また自分の感情を人に伝えられるようになる技術を伝授し、この技術が仕事や個人的な生活において役立つとする。エクマンたちは、表情が普遍的で構造的に成立する性質を持ち、感情を伝え合うことのできることばのような通信システムであり、一つの言語を学ぶように習得できると捉えている。「笑顔は世界の共通語」というメタファーを、単なる喩えに終わらせず、表情を一つの言語を分析するように分析したのである。

エクマンたちの「笑顔」という「幸福」の感情に対応する表情についての分析は、トムキンズの描写より詳細で、顔の3つのエリアを意識して記述している。だがやはり20世紀アメリカで一般的とされる笑顔の表情が無意識のうちに基準となっていることは否定できない。まず、笑い声が出るか出ないかで分類する。これは英語という言語における laugh と smile の対比を引き継いでいる。英語の laugh という語の重要な意味要素には笑い声が含まれており、笑い声を伴わない喜びの表情を smile という語が受け持つ。アリストテレスが現代英語の laugh に相当する笑いの表情を主に議論したのとは対照的に、エクマンたちは声が出る表情は明らかに喜びの表情であるとして議論する必要性を認めず、笑い声のない smile だけを分析する。次に、笑顔 smile の明確な特徴については、ほうれい線の出現、ほおの動き、目尻のシワ、目の輝きなど細かな顔の変化に言及はするが、やはり何よりも目立つ特徴を唇の位置とする。唇が両側に広がり口角が上がった20世紀アメリカで典型的な笑顔が、トムキンズの場合と同様にエクマンたちの場合にも基準とされ、普遍的な笑顔として扱われているのである。

## 結語

以上、感情と表情についての議論を、古代ギリシャの時代から20世紀まで辿ってきたが、ここで、本稿の冒頭で提示した「笑顔は世界の共通語」なのかという問いに対して、

過去の議論と照らし合わせながら改めて考えてみたい。笑顔が「言語」に喩えられるほどにコミュニケーションで機能するものなのかという点と、笑顔は世界で共通と言えるほどに普遍性を持つのかという点に分けて整理する。

まず、笑顔が「言語」のようにコミュニケーションで機能するものなのかという点について検討する。古代ギリシャの議論では、感情が表情として現れる場所は顔に限定されていなかった。よってこの時代、笑顔という顔の表情がとりわけコミュニケーションの道具として意識されていたとは考えにくい。17世紀のデカルトが表情として考察を加えた対象は顔が中心ではあったが、その顔の表情は、人間が外的刺激を受けることによって内面に生じた感情が、さらに外部へ表出するというメカニズムの中で捉えられており、対人的な機能については考慮されなかった。こうしたデカルトの感情と表情の捉え方に基づくル・ブランの表情の絵は、他人に対して見せるための表情としては描かれていない。喜びが現れた顔の表情も基本的には穏やかに描かれていて、誰かに向けて働きかけるものにはなっていない。表情は全般的に、あくまで感情が無意識の内に顔に現れてしまったものであり、コミュニケーションのために見せるものではなかったのである。ヨーロッパの宮廷文化でも日本の武士文化でも、笑顔のような表情を露わにすることは敬遠され抑制されていた(Jones, 2014; 山田, 2021)。この事実も、表情が感情を見せてしまうことになるという認識が存在し、つまり感情と表情の結びつきについては認めていたことを示しているが、それ故に尚更、表情はコミュニケーションにおいては否定的に捉えられており、コミュニケーションを円滑にするために機能する言語のように肯定的には受け取られてはいなかったということでもある。

顔の表情にコミュニケーションにおける積極的な機能が明確に意識されている研究は、19世紀のベルやダーウィンからであろう。ベルは表情を人間だけに備わる、感情を示す「普遍言語」(universal language)であると明言し(Bell, 1806, p.88)、顔の筋肉がこの普遍言語の道具であるとした。ダーウィンも人間の表情がコミュニケーションに役立つように進化したと捉えた。20世紀にはトムキンズやエクマンたちが、感情の表情として現れる場所を顔であるとし、また顔の表情が人間同士のコミュニケーションにおいて、言語に喩えられるほどに重要な機能を果たすと考え、その言語的な体系を明らかにしようとしたのである。

次に、笑顔は世界で共通と言える普遍性を持つのかという点について検討する。古代ギリシャの議論では、そもそも感情が現れる場所として顔だけを重要視してはいない。「笑顔」というものが殊更に意識されず、その独立した概念さえも存在しない場合、笑顔に相当する表情は、人々の意識においては存在しないに等しい。意識せずに現れてしまう表情と、現代のように強く意識して他人に見せまた解釈する表情とでは、その性質が当然違ってくると推察される。17世紀以降の多くの表情の研究では、顔が強く意識される。感情と表情の普遍性を前提に、顔の表情の特徴を記録しているが、その内容は研究

者によって異なる。20世紀アメリカのエクマンたちは、表情と感情との関係を詳細に分析したが、それでも自らの言語や文化からの影響から自由にはなれなかった。彼らの表情から感情を読み解く技術が実用的に機能するとしてアメリカで人気を集めたのは、アメリカを中心とした言語文化圏内での表情と感情の結びつき方を正確に分析したからであろう。エクマンたちが6種類に絞った基本的な感情は、アメリカ英語圏の人たちにとってすぐに納得のいく種類の感情であり、その感情を判別できるとされた表情の特徴は、多くのアメリカ人が無意識に顔に表しているアメリカにおいて典型的な表情のものであったと考えられる。このアメリカ英語圏で、多くの人にとっては無意識のうちに確立していた感情と表情の組み合わせを、改めて意識的に確認することは、アメリカ英語圏における非言語コミュニケーションにとって非常に便利で有効なことであったのだと推測されるのである。

表情も、その元とされる感情も、どちらも本来は明確には区分されていない連続性のあるものと考えられる。心理学の分野では、ラッセルが感情の円環モデルを提唱して、あらゆる感情を pleasure/displeasure の軸と arousal/sleep の軸からなる2次元グラフに連続的に配置した(Russel, 1980)。本来は連続している感情を、これを意識する人間が、喜びや悲しみに分類し、また本来は連続している表情を、これを受け取る人間が、笑顔や泣き顔に分類してしまうのである。何か事物を分類する際には、つまりカテゴリー化においては、言語文化の影響から自由になることは困難であると考えられる。自然に現れ出た表情であったとしても、それを見た人が、「笑顔」や smile であると認識した瞬間、その表情の普遍性は損なわれる。言語や時代や文化などの影響を受けてしまうのである。

笑顔は、現代の欧米や日本のように、笑顔をコミュニケーションの道具とする文化においては、言語のように機能する。また、理想とする笑顔の特徴が共通するのであれば、仮に用いる言語が異なる人間の間でも、笑顔は共通語であるかのように機能する。しかし、笑顔に価値を置かない文化では、笑顔を見せてもその意図は解釈されず、あるいは笑顔を見せることでかえって人間関係を悪くすることになる。例えば、現代のアメリカで好まれる笑顔を17世紀フランスの宮殿や日本の武家で見せれば、下品で失礼であるとして拒絶されたいだろう。「笑顔は世界の共通語」という表現は、この表現の中の「世界」について、時代や文化を限定することで初めて成立するのである。

## 参考文献

- Allport, Floyd Henry. (1924). *Social Psychology*. Houghton Mifflin Company.
- Aristotle. (1937). originally written ca350 BC. *Περὶ ζῴων μορίων*, Trans. by Peck, Arthur Leslie. as *Parts of animals*. In T.E. Page, E. Capps, W.H.D. Rouse, I.A. Post, and E.H. Warmington

- (Eds.), *Aristotle: Parts of Animals, Movement of Animals, Progression of Animals*. pp. 52-431. Harvard University Press. William Heinemann Ltd. (Internet Archive にて閲覧  
um:oclc:record:1050261369, 本稿中では『動物部分論』として記述)
- Asch, Solomon E. (1952). The expression of emotions, S.E. Asch (Ed.) *Social Psychology*, pp. 183-204.
- Bell, Charles. (1806). *Essays on the Anatomy of Expression in Painting*. Printed for Longman, Hurst, Rees, and Orme.
- Darwin, Charles. (1872). *The Expression of the Emotions in Man and Animals*. John Murray.
- Descartes, René. (1649). *Les Passions de L'ame*. Henry Le Gras. Google Books.
- Duchenne, Guillaume-Benjamin. (1862). *Mécanisme de la Physionomie Humaine ou Analyse Électro-Physiologique de l'Expression des Passions*. Jules Renouard, Libraire. Google Books.
- Ekman, Paul. (1972). Universals and cultural differences in facial expressions of emotion, J. Cole (Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation, 1971*, Vol. 19, University of Nebraska Press. pp. 207-282.
- Ekman, Paul. (1989). The argument and evidence about universals in facial expressions of emotion, H. Wagner & A. Manstead (Eds.), *Handbook of social psychophysiology* (pp. 143-164). John Wiley & Sons.
- Ekman, Paul and Wallace V. Friesen. (2003). *Unmasking the Face: A Guide to Recognizing Emotions from Facial Expressions*. Malor Books. 初版は 1975 Prentice-Hall, Inc. 日本語訳は工藤 力 他訳 (1987). 『表情分析入門-表情に隠された意味を探る』誠信書房
- Ekman, Paul, Wallace V. Friesen, and Phoebe Ellsworth. (1982). What are the similarities and differences in facial behavior across cultures? Paul Ekman (Ed.) *Emotion in the Human Face*, 2<sup>nd</sup> ver. Cambridge University Press. pp. 196-215. 初版は 1972 Pergamon Press Inc.
- Fox.com. "About Lie to Me". Lie to Me. <https://www.fox.com/lie-to-me/about-lie-to-me/> (参照 2022/2/22)
- Friesen, Wallace V. (1972). Cultural differences in facial expressions in a social situation: An experimental test of the concept of display rules. Unpublished doctoral dissertation, University of California, San Francisco.
- 池 沙弥. (2021). インタラクシヨンのあいづち連鎖に伴うスマイルとスタンスの関係性, 『動的語用論の構築へ向けて 第3巻』開拓社 pp. 66-84.
- Jones, Colin. (2014). *The Smile Revolution in Eighteenth-Century Paris*, Oxford University Press.
- Kambhampaty, Anna P. "The year in emojis," *New York Times*, 12/2/2012. <https://www.nytimes.com/2021/12/02/style/emojis-most-used.html>

- Klineberg, Otto. (1938). Emotional expression in Chinese literature, *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 33(4), 517-520. <https://doi.apa.org/doi/10.1037/h0057105>
- Labarre, Weston. (1947). The cultural basis of emotions and gestures, *J. Personality*, (16) 49-68.
- La France, Marianne. (2011). *Lip Service: Smile in Life, Death, Trust, Lies, Work, Memory, Sex, and Politics*, W.W. Norton & Co.
- Le Brun, Charles. (1698). *Conférence de Monsieur Le Brun Premier Peintre du Roy de France, Chancelier et Directeur de L'Académie de Peinture et Sculpture. Sur l'Expression Generale & Particuliere. Enrichie de Figures Gravées par B. Picart*. J.L. DeLorme and E. Picart le Rom. (Bibliothèque Nationale de France <https://gallica.bnf.fr/> にて閲覧). 日本語訳と解説は、小佐野重利 解題・監修, アカデミー古文獻研究会 訳, (1999). 「シャルル・ル・ブラン『感情表現に関する講演』」 『西洋美術研究』第2号, pp.146-161.
- Mervosh, Sarah, Manny Fernandez and Campbell Robertson. “Mask Rules Expand Across U.S. as Clashes Over the Mandates Intensify,” *New York Times*, 7/16/2020, <https://www.nytimes.com/2020/07/16/us/coronavirus-masks.html?searchResultPosition=1>
- Musée du Louvre (<https://collections.louvre.fr>)
- 日本経済新聞「渋谷日向子が凱旋記者会見 ゴルフ全英女子V (2019年8月6日 全編)」。 [https://www.youtube.com/watch?v=Lqo\\_XI5-K10](https://www.youtube.com/watch?v=Lqo_XI5-K10).
- Palmer, Evan. “Asian woman allegedly attacked in New York subway station for wearing protective mask,” *Newsweek*, 2/5/2020, <https://www.newsweek.com/new-york-subway-attack-coronavirus-woman-mask-1485842>
- Plato. (1889). *Platonis Parmenides et Philebus*, Wohlrab, M. (Ed.), Lipsiae. (Internet Archive にて閲覧 urn:oclc:record:1050779282). 英語訳は、Plato. (1925). *Plato with an English Translation, The Statesman, Philebus, Ion*. Trans. by Fowler, Harold N. Harvard University Press & William Heinemann Ltd.
- Russell, James A. (1980). A circumplex model of affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39(6), 1161-1178.
- 高橋 優. (2011). 「福笑い」 『福笑いの現実という名の怪物と戦う者たち』ワーナーミュージック・ジャパン
- Tomkins, Silvan. (1962). *Affect Imagery Consciousness Vol.1*. Springer Publishing Company.
- Tomkins, Silvan. (1975). The phantasy behind the face, *Journal of Personality Assessment* 39, pp. 551-560.
- 山田仁子. (2021). 「見せる笑顔への変革」 『動的語用論の構築へ向けて』開拓社, pp. 86-117.

## 参考資料出典

福岡大学 2020 第 16 回全国高校生川柳コンクール [https://www.fukuoka-u.ac.jp/unv\\_gide/fkus/senryu2020/prize.html](https://www.fukuoka-u.ac.jp/unv_gide/fkus/senryu2020/prize.html)

イオン ニュースリリース 2020/6/4 [https://www.aeon-kyushu.info/files/management\\_news/1925/pdf.pdf](https://www.aeon-kyushu.info/files/management_news/1925/pdf.pdf)

北九州市 2021 第 2 回私の SDGs コンテスト <https://www.asahi.com/ads/my-sdgs-contest/result/award02/>

京都市人権ナビ 2016 人権擁護啓発ポスターコンクール <https://kyoto-jinken.net/informations/informations-1487/>

佐世保市 2020 佐世保市まちなか徳育標語コンクール <https://www.city.sasebo.lg.jp/kyouiku/syakai/documents/hyougo2021.pdf>